The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	2023年度　意匠学会論文賞・論文奨励賞選考結果報告
Author(s)	今井, 美樹
Citation	デザイン理論. 2024, 84, p. 5-6
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/97663
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

2023年度　意匠学会論文賞・論文奨励賞　選考結果報告

学会賞選考委員会
副委員長　今井美樹

論文賞

該当なし

選考理由

2023年度の『デザイン理論』投稿論文は7編あり，いずれの学術論文も優れた論旨・論考で，選考委員会は議論に時間を割いて検討したが，今年度の最優秀として推挙するには懸念があり，該当なしという結論に至った。

最近の役員会でしばしば話題になることだが，編集委員会からの報告によると，掲載に至る投稿者にはベテランが多く，一方，若手研究者の投稿数は少なからずあるものの，査読の段階で採択されないケースが多いと聞く。今年度の投稿者も7名のうち，過去に『デザイン理論』に採択歴のある者が6名，意匠学会賞・論文賞の受賞歴のある者が2名，先述の通り精緻な論考の論文揃いであるが，この中から1位を決めるには総体的に論文本数が少なく，今年度から奨励賞が設けられたことから，論文賞の採択を見送り，奨励賞の授与者を審議することとした。

論文奨励賞

矢島由佳　「江戸時代にみる花結びの伝承 ── ジェンダーの視点から」

授賞理由

矢島由佳会員の標記の学術論文は，江戸期における花結びが，女子の手習いとして受容されていく過程を，文献や絵図の調査から解明しようとする内容である。平安時代に成立し，本来は茶道・香道において培われた花結びの系譜が，江戸時代の女性にとっては平安時代の高貴な女性の教養としてのイメージが形成され，女子用往来物を通して出産祝い，手芸，被布の装飾などの多元的な意味合いでたしなまれていたと論じている。その一方で，男性にとっては家元制度の中で伝承される奥義として認識され，花結びの系譜が男女で異なることを明らかにした。

長い歴史をもつ結びの装飾が受容される過程を，ジェンダーの視座で捉え，男女の別で

その系譜が異なることを解明した論考はユニークであり，平安時代から江戸時代までの多様な資料から情報を収集し丹念に読み解いた研究が評価を得た。また女性における紐結びが，本論から後の時代の明治期の学校教育へと転化してく論拠も示唆しており，今後に続く研究も期待される。

矢島会員は，当学会での学術論文に「近現代日本における水引に関する記憶の系譜」（77号），口頭発表に「オリンピック誘致と結びデザイン」（2020年），「江戸時代の茶道および香道に見られる花結びに用いられた花卉モチーフについての検討」（2022年）があり，いずれも日本伝統とも言える結びと花モチーフの工芸についての研究成果を発表されている。これらの研究業績も踏まえ，本論文は論文奨励賞にふさわしい論文として評価された。

選考経緯

論文賞は『デザイン理論』82号，83号に掲載の学術論文7編を対象とし，今井美樹副委員長，石川義宗委員，千代章一郎委員，平光睦子委員，村井陽平委員，米屋優委員の6名が選考を行った。事前に各委員が1位・2位・奨励賞の選出とその理由を記述し，これらの結果をもとに後日，伊原久裕委員長をオブザーバーとしてディスカッションを行い（千代委員，米屋委員は欠席），各論文を精査することで上記の結論を得た。

ディスカッションでも話題となったが，次年度の掲載数の増加，特に若手研究者の論文採択に期待したい。

以上